



台風10号の経路

台風10号は8月19日に関東の南東海上で発生し、30日に東北地方に上陸した後、日本海に抜けて、31日に「温帯低気圧」となった。

最大の特徴は経験したことがないコース。台風の標準的な経路は、あたかも弓の弧を西に向けたような放物線を描くが、それとは全く異なっていた。10号の経路は図の線で示すように、①発生後ゆっくり南西に②その後Uターンして北東へ③最後は北西へと三つの期間に分けられる。

2016.9.4



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

台風10号

考えられる理由は、①例年に比べて東に偏っていた小笠原高気圧の一部が分離して日本の南西に移動した際、弱い北東の風で流されて南西へ②分離した高気圧が解消し小笠原高気圧の西側を回る南西風に乗って北東へ③日本海で急発達した低気圧の東側を吹く南東風に乗るように北西へ進んだことにとまとめられる。

長い期間、台風としての勢力を維持できたのは、南方海域の海面水温が例年より高かったため、台風というエンジンの燃焼に必要な暖かく湿潤な空気を継続して補給できたから。

かつては、進路予報は予報官が経験に基づいて台風を流す風を見積もっていたが、現在は物理法則に基づいた「台風進路予報モデル」で行われている。10号のような迷走・Uターン台風も5日程度前から予測できるレベルに発展した。
(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



9月2日、鹿島神宮の行宮(あんぐう)祭で「鹿島おどり」が奉納された=写真。かつて正月に鹿島神宮の神官が亀の甲羅の焼け模様でその年の吉凶を占い、踊り子が「事触れ」の札を携えて地方を巡ったという。約20年前に踊りが復活した。立春から数えて220日目、9月10日は「二百二十日」。台風で農作物が被害を受けやすい厄日といわれている。むしろ大きな被害をもたらす台風は9月中旬以降だ。すでに9、10、11号が続けて上陸した。あちこちで田が金色に染まり、稲刈りが急ピッチで進んでいる。

2016.9.11



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

鹿島おどり

稲作は田植えから収穫まで約半年にわたる長丁場、その間、日照りや大雨、台風などに見舞われるリスクが高い。かつて稲作は自然任せであったが、近年は長期予報の精度も格段に向上しているため、継続的にモニターすることにより、施肥や消毒、かんがいなどのタイミングに役立つはず。生産や出荷などのビジネスにも。

季節予報として「暖候期(6月~8月)・寒候期(12月~2月)予報」のほか、「3カ月予報(毎月25日頃発表)」「1カ月予報(毎週木曜発表)」があり、気温、降水量、日照時間が平年に比べてどのくらい偏るか、カラフルな地図で示されている。従来これらの予報は、統計的手法で行われてきたが、現在は物理法則に基づいて、南半球を含む全球を対象とした「数値予報」で実施。気象庁のホームページで容易に閲覧できる。
(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)